

女子青年の性同一性に関する研究

—親子関係を中心に—

児 玉 真 季

I. 問題と目的

青年期には人は様々な変化—発達的な変化や社会的役割の変化などを体験し、自立していくための様々な課題を達成していく。性同一性の形成も、青年期における重要な発達課題の一つであるが、女子の場合、自分の性や性役割の受容に困難があること、女性の自我同一性に性同一性が深く関わっていることが従来の研究で指摘されている。また、女性の性同一性に関する精神病理学的な側面からの研究も多く、例えば、Anorexia Nervosa（神経性食欲不振症）をはじめ、広く摂食障害に関して女性性確立の問題が関与しているとみる研究者は多い。成人女性の神経症や登校拒否の青年期女子症例における女性性受容の問題も指摘されている。しかし、性同一性そのものを扱った実証的研究は少なく、女性性・男性性や性役割の研究など関連領域における研究も、概念・定義上で研究者間の明確な一致がみられず、十分に統一されたものとはいえない状況にある。その中で、松本（1983）は、性同一性を、Erikson, E.H.の自我同一性理論に沿ってとらえ、女子青年の性同一性のあり方及び関連する諸要因について面接調査により検討し、詳細にまとめており評価できる。ただ、なるべく多くの対象から情報を得、背景要因との関連をより一般的な傾向としてとらえるためには、性同一性を測定し得るような尺度の作成も必要である。児玉（1991）では、松本の性同一性モデルを参考にして、性同一性を自我同一性の一側面としてとらえ、生物学的次元、心理・社会的次元、実存的次元の3つの次元からなる、「女性としての自分に関わる個人の内的・外的体験、意識の一貫性、持続性、統合性という同一性の意識感覚」として、性同一性尺度の作成を試みている。女子大学生を対象とした調査からその因子構造を明らかにし、6つの下位尺度からなる性同一性尺度について、高い信頼性とある程度の妥当性を得たが、下位尺度の中には、内容的に検討を要する部分も残された。

また、性同一性形成の背景要因としては、対人関係の重要性が指摘されている。性同一性の下位概念の中で、特に性役割の認知・受容は、最も社会の影響を受け、変化していく部分であるが、その社会的・文化的な性役割基準は、両親や周囲の大人の期待やしつけ、仲間との交

流など、主に対人関係を通して伝えられていくものであり、中でも子どもの社会化に人生の初期から重要な役割を果たす家族、特に両親の与える影響が大きいと考えられる。両親の養育態度や性役割観との関連性を示唆する研究は多いが、両親の影響を受ける程度は両親との関係性にも左右されるものと思われ、養育態度だけでなく関係性についても調べた上で、性同一性のあり方との関連性を検討する必要がある。なお、性同一性の達成には同性の親への同一視が重要であるという指摘が多く、児玉（1991）では母娘関係を中心に検討し、その結果からは、女子青年の性同一性のあり方に母親との関係性及び母親の女性観に基づいた養育態度が関連していること、特に母親（の生き方）への共感が重要な要因となっていることが示唆された。また、性同一性の形成には、父親との関係性や、家庭における家族内力動も関与している可能性があることが面接調査や臨床報告より指摘されている。ただ父親の場合、母親のように同一視が影響するとは思われず、父親と母親では関係性の影響の仕方が異なっていることが考えられる。母親との関係の他、父親との関係と女子青年の性同一性のあり方との関連性についても、検討することが必要である。

以上から、本研究では、性同一性尺度の作成及び尺度の信頼性・妥当性の検討を第1の目的とし、さらに性同一性尺度を用いて、女子青年の性同一性のあり方と親娘関係及び親の女性観に基づいた期待との関連性を検討することを第2の目的とする。

II. 研究1

目的：研究1では、性同一性尺度の作成、及び尺度の妥当性・信頼性の検討を行うことを目的とする。児玉（1991）で作成した尺度で不備のみられた下位尺度について項目の加筆・修正をし、因子分析による検討を行う。また、性同一性が、自我同一性の一側面であると仮定していること、社会的な性役割の受容・志向と関係すると考えられることから、性同一性と、自我同一性、性役割特性との関連性を調べ、構成概念妥当性の検討を行う。

方法：調査対象者は、大学1、2年生女子249名と高校2年生女子230名の計479名。1993年6月中旬から7月中旬にかけて、質問紙法による調査を集団式で実施。質問紙は、①性同一性尺度（GIS：児玉（1991）の尺度の

項目を修正・加筆)50項目, ②同一性次元尺度 (IDS : 加藤 (1986) による次元構造の自我同一性の成立の程度を測定する尺度) 14項目, ③性役割測定尺度 (ISRS : 作動性, 共同性, 美・繊細を下位尺度とする, 伊藤 (1986) の尺度) 24項目から成っている。なお ISRS は, (a)自己評価 (自分にどの程度あてはまるか) と, (b)自己理想 (どの程度望ましいと思うか) を尋ねる。

結果と考察: 性同一性尺度については, 因子分析結果より, 大学生, 高校生ともに, 「女性であることの満足感」, 「異性及び女性役割・特性の積極的受容」, 「男性依存的生き方志向」の3因子が得られ, 各因子の項目群をそれぞれ性同一性尺度の下位尺度とした。モデルで再検討したような6つの因子は得られなかったが, モデル検証における質問紙調査や因子分析の限界等も考慮し, 修正・加筆した項目が2つの下位尺度の一因子性を高めた可能性があったことから, 各尺度の内容を検討し, 性同一性を操作的に定義しなおした。各下位尺度の信頼性については, クロンバックの α 係数を求めたところ, .80から.90の値が得られ, 尺度の内的整合性にはほとんど問題のないことが示された。妥当性については, GIS の「男性依存的生き方志向」以外の下位尺度と IDS の間に有意な相関がみられ, また, GIS と ISRS の各下位尺度の間にも, 予測されたような有意な相関がみられ, 性同一性と自我同一性, 及び性役割特性との関連性についての仮説が検証され, 尺度の構成概念妥当性に問題のないことが示された。

III. 研究 2

目的: 研究 2 では, 女子青年の性同一性のあり方に, 親娘関係及び両親の女性観に基づいた期待がどのように影響しているかを, 性同一性尺度を用いて検討することを目的とする。仮説: 両親との関係性のよさは娘の女性であることの満足感を高め, 女性役割志向度を高めるだろう。その際, 母親の場合は, 関係よりも娘の母親への共感的態度がより重要な要因となるのに対し, 父親の場合は, 娘の共感的態度よりも, 関係性そのものの方がより重要な要因となるだろう。また, 娘の女性役割志向度は, 両親の女性観や娘に対する期待に影響を受けるが, 両親との関係が悪い場合には, その影響度は低く, 関係がよい場合の方が影響を受けやすく, 関係がよい場合, 親の娘に対する期待が女性役割を重視し, 家庭志向的である方が, 社会参加を重視し, 自立志向的であるよりも, 女性役割・特性を志向しやすいであろう。

方法: 調査対象者は大学 1 年生女子 242 名と高校 2 年生女子 262 名の計 504 名と, その両親。1994 年 11 月下旬から 12 月中旬にかけて, 質問紙法による調査を実施。本人を対象とした調査は集団式で実施し, 両親を対象とした

調査は留置とし, 質問紙は郵送により回収。大学生では母親 107 名, 父親 105 名, 高校生では母親 123 名, 父親 115 名の協力が得られた。本人用質問紙はフェイスシートと以下の 5 つの尺度からなる: ①性同一性尺度 (研究 1 で作成) 31 項目, ②母娘関係尺度-娘用 (児玉 (1991) の「母親との情緒的つながり」尺度を加筆・修正) 16 項目, ③母親への共感的態度尺度 (児玉 (1991) の「母親の生き方への共感」尺度を加筆・修正) 8 項目, ④父娘関係尺度-娘用 (②の尺度を参考にして作成) 16 項目, ⑤父親への共感的態度尺度 (③の尺度を参考にして作成) 8 項目。母親用及び父親用質問紙はフェイスシートと以下の 2 つの尺度からなる: ①親娘関係尺度-親用 (母娘関係尺度-娘用を参考にして作成) 16 項目, ②親の女性観に基づいた期待尺度 (自立志向的, 家庭志向的な女性観や期待等を内容とする, 児玉 (1991) の「母親の女性観に基づいた養育態度」尺度を参考にして作成) 10 項目。

結果と考察: 学年差では, 大学生の方が高校生よりも性同一性や親娘関係の得点が有意に高かった。尺度間相関をみると, 女子青年の性同一性と親娘関係の関連性について, 母娘関係と父娘関係で娘の性同一性に与える影響の仕方がやや異なっていることが示された。母親との関係では, 関係性そのものよりも娘の母親への共感の方が娘の性同一性のあり方により影響し, 母親に対し共感できている方がより女子青年の性同一性が安定する (女性役割等を受容でき, 女性であることに満足感を感じられる) こと, 父親との関係では, 娘の父親への共感よりも関係性そのものの方がより影響し, 父親との関係がよい方が娘の性同一性が安定することが示された。また, 親の女性観に基づいた期待が家庭志向的である方が, 娘は女性役割を受容しやすく, 女性であることの満足感を感じやすいことが示された。さらに, 両親との関係及び両親の期待を要因とする 4 元配置分散分析 (標本数の少なさ等の理由から, 3 因子以上の交互作用は誤差とみなした) を行い, 親との関係性及び親の期待と娘の性同一性のあり方との関連性について検討を加えたところ, 母親, 父親ともに, 親との関係が悪い場合には養育態度の影響をあまり受けないのに対し, 親との関係がよく, 親への共感が高い場合において, 親の期待の影響を受け, 親の期待が家庭志向的である場合に娘の女性役割・特性の受容度が高くなるが, 自立志向的であると娘の女性役割の受容度が低くなるという結果が得られた。以上から仮説についてはほぼ検証されたが, 母娘関係及び父娘関係にみられた交互作用について検討すると, 性同一性の形成要因について, 親娘関係だけとってみてもより力動的にとらえることの必要性が示唆された。